

# ケイ素化学協会誌

2018年10月 第35号

## 巻頭言

ケイ素化学協会の今後	久新 莊一郎	・・・	1
------------	--------	-----	---

## ひとコト

ケイ素のクロスカップリング30年	檜山 爰次郎	・・・	3
------------------	--------	-----	---

## トピックス — 昨日今日そして明日のケイ素化学

金属原子内包ケイ素ケージ化合物	中嶋 敦	・・・	5
固体状態で強く発光する芳香族ケイ素化合物	山野井 慶徳	・・・	11
セラミックス前駆体としての有機ケイ素ポリマー	長谷川 良雄	・・・	18

## 国際学会報告

49th Silicon Symposiumに参加して	海野 雅史	・・・	27
9th European Silicon Daysへの参加報告	中村 泰司	・・・	29
9 <sup>th</sup> European Silicon Days in Saarbrückenへの参加報告	横内 優来	・・・	30
The 15th International Symposium on Inorganic Ring Systems (IRIS-15)	時任 宣博・水畠 吉行	・・・	31

## 奨励賞

シロキサンの精密合成	松本 和弘	・・・	33
------------	-------	-----	----

## シリコンスクエア — 会員の広場

アルコキシランの合成	山本 一樹	・・・	36
日本のコンビナートの将来とロシア語	深谷 訓久	・・・	37
海外ボスドク体験談	土戸 良高	・・・	38

## 研究室紹介

東京大学生産技術研究所 物質・環境系部門	砂田研究室	・・・	39
山形大学理学部理学科	近藤研究室	・・・	40
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻	寺尾研究室	・・・	41

## 第22回ケイ素化学協会シンポジウムプログラム

## 事務局より

入会手続きについて/会員情報等の変更について	・・・	49
ケイ素化学協会名誉会員、役員および顧問名簿	・・・	50
平成29年度会計決算報告書	・・・	51
決算監査意見書	・・・	52

## 編集後記

・・・	53
-----	----

## ケイ素化学協会の今後

群馬大学大学院理工学府 久新 荘一郎



有機ケイ素化学では長い間、日米欧が世界の三極と言われてきた。しかし現在では新興国の研究レベルが大きく伸びてきており、今後の地図が塗り替えられる可能性もある。我が国のケイ素化学は今後もアクティビティーを維持していくのであろうか。これはケイ素化学協会にとって非常に重要な問題であるが、これまで議論する機会がほとんどなかった。この機会に会員の皆様、特に今後の本会の運営で中心的な役割を果たすと思われる 40~50 歳台の研究者に参考にしてもらうために、問題点をまとめておきたい。

### 1. 若手研究者の減少

一番大きな問題は若手研究者の減少であると思う。例えば群馬大学の有機ケイ素化学研究室設立の頃は、永井洋一郎教授、渡邊濱夫助教授、松本英之助手（本会元会長）、中野多一技官の 4 名の体制で、教授より中堅・若手スタッフの方が多かった。現在の群馬大学では、教授 1 に対して、中堅・若手スタッフは 0 か 1 である。これは定員削減のため、若手のポストが削られたことと、中堅・若手スタッフをなるべく独立させようという方針のためである。一部の大学を除いて、ほとんどの大学の研究室でも、教授より中堅・若手スタッフの数が少なくなっている。

る。また以前は、東大、京大、東北大、筑波大などのケイ素化学関係の研究室の卒業生が他大学の若手スタッフとして着任する例が多数あったが、現在ではむしろ珍しくなっている。以上のような理由で、本会では 40 歳以上の研究者は多いが、30 歳台の研究者は非常に少ない。20~30 年後にどのような結果になるか、我が国のケイ素化学のアクティビティーにかかる問題になる可能性がある。

### 2. 賛助会員の減少

本会が設立された直後の 1997 年には賛助会員数は 40 社であったが、現在は 23 社であり、ほぼ半減している（図 1）。

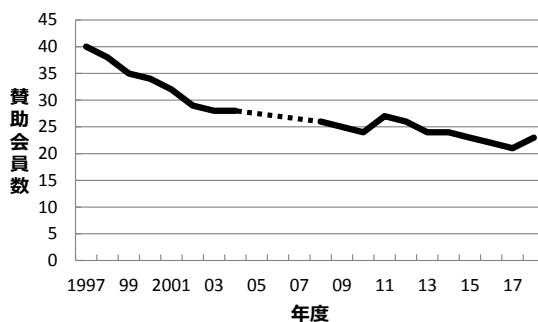


図 1. 賛助会員数の変化。

企業ではケイ素製品に対する戦略の変更があるため、自然減は起こり得る。それに相当するだけの入会がないことが問題である。理由の一つは PR 不足と思われる。もう一つは、しばしば指摘されてきたようにケイ素化学協会シンポジウムが